

「第8回 いのちの学習会」

表題の学習会に参加した。主催は「バクバクの会中部支部」である。呼吸器をつけた子どもたちの「いのちと意思」を大切に、子どもたちが、地域の中で、“ひとりの人間・ひとりの子ども”として尊重されながら、当たり前で安心して暮らせる社会の実現をめざした活動を25年続けている団体だ。

最初の講演は、バクバクの会会長の太塚孝司さんによる「脳死・終末期医療について考える」である。終末期医療や尊厳死について、尊厳死法制化の問題点などを中心に話した。命について、尊厳死法案について、認識不足を痛感させられたが、本当に勉強になった。つづいて、林京香さん、父・智宏さんの「呼吸器と共に」と題した心に迫る話である。話の前に、京ちゃんの妹・千陽ちゃんから、姉思いの「あいさつ」があり、会場から温かい拍手があった。



林さんの話は、「医学的モデルから社会モデルへパラダイムシフト」から始まり、障害者基本法16条「教育」を取りあげる。「共に教育を受けられるよう配慮」の実態を教育現場から問いください。家での工夫、登校、学校生活などについて、数多くの写真によりビジュアルに説明した。例の運動会の写真を見て、微笑んでしまった。鍼灸のプロらしく、「東洋医学」の視点から、「健康管理のポイント」を話されたのも印象的であった。



講演の3番目は、わっぱの会の斎藤縣三さんによる「林京香さんと共に 教育行政と話し合い経緯」である。「看護介助員」配置や「給食ミキサー食」など、名古屋市教育委員会との話し合いについて、辛口コメントも交えて語った。この話し合いには、斎藤まこと市会議員の力添えも大きかったという。

3人の講演と会場からの発言は、「いのちの学習会」にふさわしいものだった。発言しようと思ったが、つい遠慮してしまった。京ちゃんと偶然知りあって、まもなく2年になる。あらためて「生きること」の大切さを考えさせられた。

学習会の会場は、南医療生活協同組合の南生協病院の会議室であった。ずいぶん昔、南区の柴田にあった頃にお世話になったことがある。緑区の南大高駅前に移転後、初めて訪ねた。病院らしくない建物で、まるで「メディカルタウン」のようであった。

(2015年10月27日)